色彩学　第2巻　第2号　2023年　77－78

特集「大会支援のためのクリエーション」
Special Issue: Creation for Supporting Academic Conferences

第53回全国大会［名古屋］'22のビジュアルデザイン
Visual Design of the 53rd Annual Meeting in Nagoya 2022

渡辺 真由子　ジュエリーデザイナー
Mayuko Watanabe　Jewelry Designer

1. 第53回全国大会［名古屋］'22の概要

日本色彩学会第53回全国大会［名古屋］'22は，2022年6月25日（土），26日（日）の2日間，椙山女学園大学星が丘キャンパスでの現地参加とオンライン参加の両方を取り入れた本学会初となるハイフレックス形式で開催された[1]．研究・作品発表66件，参加者数230名，半数以上が現地参加となった．新型コロナウイルスの影響で2019年以降中断していた現地開催を，２年半ぶりに再開させるにあたり，大会テーマは『カラー・レジリエンス Our transition toward COLOR resilience』に決定した．招待講演として，三鷹の森ジブリ美術館学芸員の伊藤望氏による「アニメーションの色彩　～スタジオジブリ作品を彩った保田道世氏について～」，特別学術講演として，浜松医科大学医学部の針山孝彦教授による「蟲（生き物）が観る世界を学び持続性社会を実現する蟲鳥学の創成」が企画された．お二人の講演は，参加者に大きな刺激を与え，全国大会らしい盛り上がりに貢献した．また，助成金や寄付金を活用して，受付で現地参加者にお渡しする安全アメニティ（マスクや除菌シートなど）が，製作された．このように，本大会はWithコロナにおける新たな全国大会の形を示す機会となった．

2. 大会ビジュアルのコンセプト

2021年11月，大会テーマが『カラー・レジリエンス Our transition toward COLOR resilience』に決まった．数多くの困難を抱えた世の中でも，色彩研究が，強く，美しく，しなやかに世界を開く鍵になっていくようにというメッセージが込められたテーマである．さっそく，それを視覚的に端的に示し，印象・記憶に残る大会ビジュアルを制作することになった．

デザインする際に特に大切にしたのは，「レジリエンス」というキーワードである．困難や脅威に直面しても柔軟に適応する力，再起する力を意味する．そこで，バラバラにされた色彩の配置を元に戻す立体パズル・ルービックキューブを使うアイディアが思い浮かんだ．立体パズルは，多面的な視野，論理的な思考，先を読む力がないと解くことができない．レジリエントに生き抜くために私たちに求められるものと一致すると考えた．最終的にキューブオブジェをメインモチーフとして3次元でデザインし（図1），共通素材として用いることにした．また，開催に向けて学会員が一丸となりモチベーションを高めていくにはどうすべきかを考え，広報フェーズに合わせて大会ビジュアルを3段階で展開することを思いついた．広報タイミングが，12月（発表募集），2月（参加募集），5月（前納〆切）の3回になることを想定し，表現内容を順に変化させることにした．

3. 大会ビジュアルの制作

中央に配置するキューブオブジェは，3次元モデリングソフトRhinoceros 3Dを用いて制作した．また，キューブオブジェの背景は，大会会場である椙山女学園大学の近くの東山スカイタワーから眺められる景観を撮影し，時間帯として，夜，夜明け，日中の3段階を用意した（図2）．以降では，大会ビジュアル第1弾（発表募集），第2弾（参加募集），第3弾（前納〆切）（図3）のそれぞれについて説明する．

図1. メインモチーフ

図2. 背景（東山タワーからの景観）

3. 1　第1弾 Before Day

開催まで半年，発表募集の広報に使うビジュアルであるため，まずは色彩に焦点をあてることにし，大会サイト上部に表示されたときのインパクトも重視した．イベント前夜祭に打ち上げる花火のイメージから着想し，背景の景観は夜景にし，キューブオブジェの色彩にはネオンカラーを使用することにした．また，開催地である名古屋を視覚表現したいという思いか

ら，キューブオブジェにペイントする色彩には，名古屋の伝統色（DIC グラフィクス社，2015）より７色（金鯱，名古屋城銅瓦，黄瀬戸，家康の具足，大須観音，ういろう，県花の杜若）を選定した．ビジュアル第１弾のコンセプトは，Before Day（夜明け前）とした．

3．2　第２弾 Sunrise

開催まで３ヶ月，久々の現地開催を意識し，名古屋の見どころを強調して，現地参加を誘致する広報に使うビジュアルである．そのため，キューブオブジェの表面には，名古屋を象徴する建造物や造形を配置することにした．最終的に，名古屋市広報課写真共有サイト「フォト蔵」，名古屋城公式ウェブサイトの許可を得て，９種類選んだ．上から右回りに名古屋城本丸御殿，オアシス21，和菓子「藤団子」，名古屋市市政資料館，名古屋市科学館，名古屋城，徳川園，スフォルツァ騎馬像である．なお，運営も参加も本格的な準備が始まる時期であったことから，背景の景観は，夜明け・日の出のイメージとした．ビジュアル第２弾のコンセプトは，Sunrise（日の出）である．

3．3　第３弾 Nice Day

開催まで１ヶ月，紺碧の空に昇った太陽の光と新緑と山々が参加者を明るく温かくもてなすイメージを描き，最後の広報ビジュアルを制作した．背景には，東山スカイタワーからのぞむ名古屋東部の景観を選び，開催地である椙山女学園大学星が丘キャンパスが右側手前に入るように写真撮影した．キューブオブジェの表面には鏡面反射を表現することにし，眩しく力強い太陽と，虹の輪を映りこませた．虹の輪は，太陽を丸く囲うように現れる自然現象の一種で，ハロ・日暈とも言われる．第２弾では，色彩文化や歴史を盛り込んだのに対し，ここでは，光の物理を科学的に扱う学会であることを表現した．また，ビジュアルを３段階で変化させる序破急の最後の役割として，大会テーマに込められた未来への希望を強くシンプルにメッセージするよう心がけた．ビジュアル第3弾のコンセプトは，Nice Day（良き日）である．

4．ロゴやグッズの制作

ビジュアル第１弾のキューブオブジェを元に，ロゴマークを制作した（図４）．デジタル媒体用のＲＧＢ，印刷媒体用のＣＭＹＫに対応した２種類である．それを不織布マスク，ボールペン，オリジナルポーチ，ウェルカムカードなどに印刷し，安全アメニティとして大会会場の受付で参加者に配布した（図５）．また，３つのビジュアルを A0 サイズの半光沢紙に印刷し，３枚をならべて会場 10 ヶ所に貼ることにより，参加者を出迎えた．

5．評価とまとめ

大会ビジュアルは，大会サイトの上部に常時掲載し，現地参加者には会場の空間や身に着けるグッズ上でも触られるようにするとともに，大会初日に，本ビジュアルの制作意図やプロセスを説明する発表を行った．グラフィック表現のわかりやすさ，鏡面反射の表現力などが，制作担当者の今後の課題として残った．発表会場では，ロゴ入りマスクを着用する参加者の姿が多数見られた．受付グッズは，オンライン参加者からも希望が出るほどであった．今回のビジュアル制作を通じて，色彩研究に関係する多様な要素を取り入れながらデザインすることを実践的に学ばせていただき，感謝している．大会参加者が場を楽しみ，レジリエンスに活動を盛り上げるきっかけとなってくれたことを願っている．

参考文献

１）第53回全国大会［名古屋］'22実行委員会：日本色彩学会第53回全国大会［名古屋］'22開催報告，色彩学，2022，第１巻，第３号，pp.170-176

図3. 大会ビジュアル（左から第１弾，第２弾，第３弾）

図4. ロゴマーク

図5. 安全アメニティ